

『マーク式基礎問題集 現代文 九訂版』

落丁について

『マーク式基礎問題集 現代文 九訂版』 1月20日発行 第3刷におきまして、
114ページの最後にあるべき選択肢が欠落しております。

これは、109ページから始まる文章が少しずつ送られてしまった結果、114ページの
選択肢が欠落したものです。たいへん申し訳ございません。

ここに該当する「正しい」6ページ分を掲載させていただきます。

ご利用の皆様にはご迷惑をおかけしますこと、重ねてお詫び申し上げます。

問3 傍線部B「四国にたいして不愉快な気持ちをもちながら彼の顔を見あげた」とあるが、なぜ「私」は「四国に

たいして不愉快な気持ち」をもったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 四国が「私」を無神論者だと決めつけることで、教授の好意を自分の方にのみ引き寄せようと計ったから。
- ② 「私」こそ本当の基督教徒だと内心思っていたが、四国がそれを口にするのを封じてしまったから。

③ 「私」への質問に対して四国が勝手に答えておきながら、「私」のために答えてやったような顔をしていったから。

④ 「私」が無神論者であることは教授に知られたくなかったのに、四国がそれを教授に言ってしまったから。

⑤ 四国自身が無神論者であるのに、「私」がそうだと言って、自分の信仰のなさを教授に隠そうとしたから。

問4 傍線部C「留学生たちが陥る罠」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 卑屈な態度を仏人に見せる同じ国の留学生仲間と一緒に嘲笑するという卑怯な手まで使って、留学生同士の連帯感を持つとすること。

② よく身についてもいない自分の国の民族舞踊まで持ち出して仏人の御機嫌をとり、他の留学生仲間を出し抜いて仏人に近づこうとすること。

③ 媚びへつらつておどけた振る舞いをする留学生仲間を見て面白がっている仏人をひそかに嘲笑すること
で、仏人に対する優位を保とうとすること。

④ 奇声を発したり体をくねらせたり様々な滑稽な仕草によつて笑わせるといった卑屈な行為までして、仏人の意を迎え親しくしようとすること。

⑤ 滑稽なまねをしてでも仏人に取り入ろうとしたり、逆にそのような仲間を嘲笑しさえして、他の留学生仲間以上に多くの仏人と友達になろうとすること。

問5 この文章の表現や構成に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 1行目から93行目までは、「私」と「四国」が留学したときの出来事が描かれている。95行目から最終行までは、日本に帰国してからの「私」と「四国」の様子が描かれるが、94行目に空行があることで、帰国後の「私」にとつて、留学中の出来事は遠い過去になりつつあることが示されている。

② 1行目は「一九五〇年」に起こった歴史的出来事を紹介する一文から始まっている。このことに象徴されるように、登場人物の心情や彼らにまつわる出来事を描くだけでなく、小説全体を通して、当時の時代背景や日本社会のありようが読者に詳細に伝わるように配慮されている。

③ 32行目から34行目にかけて、「私」がぼんやりと机の上の「十字架」を眺めながら、なぜか「四国」が言つた言葉を思い出していることが描写されている。これは「私」が意識的にしたことではないが、これか

ら後の「四国」のありようを暗示するものになっていると捉えることもできる。

④ 72行目、73行目、86行目、87行目では、「私」の心の中の声にカッコがつけられている。これらはすべて「私」が今まで自分の内面に隠してきた思いであり、カッコがついているのは、様々な「私」の心情の中でも特に、誰にも知られてはならない思いを表したものだからである。

⑤ 76行目「可愛いポーラン」という言葉にはカギカッコがつけられている。これは、仏人の学生の前で見るポーランの振る舞いが、周囲の人々には一見可愛いものとしてうつりながらも、そのような振る舞いに複雑な思いを抱く「私」には可愛いと感じられないことを表すものである。

⑥ 101行目から102行目にかけて、「四国助教授、基督教の倫理学」という揭示が、雨にぬれた掲示板の中にとめられていることが書かれている。この場面は、「私」との友情を裏切った利己的な「四国」の将来に暗い影がさすであろうことを、読者に予感させるために設定されたものである。

問6 後に示すのは、本文と次の【資料】を読んだ六人の生徒が、教師の問いかけを受けて話し合っている場面である。この場面について、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

近頃よく考えることなのだが、遠藤周作の作品の魅力の一つとして欠かせない要素は〈思いやり〉の深さにあるのではないか。

太宰治は「美しい感情をもって、人は悪い文学をつくる」とかつて言ったことがある。^(注)ジッドもまた

作品の創造に関しては「悪魔の協力が必要だ」とまで断言している。

こういう創造の態度と遠藤氏のそれとは決して異質ではない。遠藤周作もまた人間悪にきわめて敏感な作家だからである。しかも悪を抉^{えぐ}り出すことにかけては後れを取らぬ人であるが、決して告発しようとはしない。モラリストとしての感覚が動き、対象をとらえても、かならずその悪が、反省的に自分の内面にかえつてくるところにその特色がある。そこをさして私は〈思いやり〉と言ったのである。

戦後文学の特色の一つに自己の内面を凝視しようとする基本的態度がある。西欧二十世紀文学の一般的特色が尾をひいていたとも言えるだろうが、それだけではあるまい。戦争という巨大な悪の陽^ひかげに生きてきた者の心の翳^{かげ}りから生じたものであろう。遠藤周作の決して告発するまいとする態度を（これを私は〈思いやり〉と言ったのだが）よく見ていると、氏の文学作品はすべてそういう反省的な自己凝視から生まれたものだと考えられてくるのである。

（上総英郎「解説」による）

（注）ジッド——フランスの小説家。評論家（一八六九～一九五一）。

【話し合いの場面】

教師―【資料】は、「異郷の友」が収録されている遠藤周作の小説集『最後の殉教者』の解説として、文芸評論家の上総英郎によって書かれたものです。この【資料】を踏まえて、本文について話し合ってみましょう。

Aさん―【資料】には、本文の著者である遠藤周作について、「人間悪にきわめて敏感な作家」であり、「悪を
決りだす」と書かれています。本文で最も悪人として描かれているのは、主人公と同じ日本人留
生の四国邦夫ですね。

Bさん―主人公の「私」にはキリスト教に関心がないと言って置きながら、フランス人教師にはキリスト教哲
学に興味があると答えたり、そのフランス人教師の前で「私」を貶めるような発言をしています。本
文で四国は明らかに偽善者として描かれていますね。

Cさん―本文でその悪が決りだされているのは四国だけではありませんね。道化を演じ、フランス人学生にお
もねる態度をとっている黒人の学生にも、それをフランス人学生に合わせるようにして嘲笑しながら
ながめている同じアフリカ出身の留学生たちにも、「人間悪」を見出すことができます。

Dさん―日本人留学生の四国とアフリカ出身の留学生たちには共通点があります。それは

Eさん―その点は主人公の「私」も共有していますね。このことが「私」の四国に対して抱く感情に関係して
います。その感情には

II

Fさん―【資料】の筆者は、このような主人公の描き方は「反省的な自己凝視」から生まれたと言っています。

そして、作家のこの姿勢には「戦争という巨大な悪」が影を落としているとも言っています。「異郷
の友」は一九五〇年頃の出来事として書かれています。終戦からまだそれほどたっていないし、日
本がまだ戦後復興を遂げていない時期ですね。

教師―この小説が描いている時代がどんな時代であったかも踏まえて読むと、今まで見えていなかったこの
小説の別の面も見えてくるかもしれませんね。

(i)

空欄

I

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 留学生たちが留学先のフランスで成功し、少しでも有利な地位につこうとして、打算的ですがしく振る舞っている点

② 留学生たちが留学先の生活に早く溶け込もうとして、自分の本心を曲げてまで、フランス人の学生たちに迎合している点

③ 先進国であるフランスにやって来た留学生たちが、フランス人の学生たちに気に入られようとして、互いに貶めあっている点

④ 先進国であるフランスにやって来た留学生たちが、フランス人の学生たちに気に入られようと、卑屈な態度をとっている点

(ii)

空欄

II

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 他人の中に自分の醜悪な影を見出して覚える自己嫌悪の感情も混ざっている

② フランスでも日本でも巧みに立ち回る四国への嫉妬心も混ざっている

③ 自分と同じ悪の種を共有する者への愛憎相半ばする感情が含まれている

④ 外国に滞在する日本人の態度を典型的に示す四国への羞恥心が含まれている